

保育者の育児意識の変容（Ⅱ）

—「愛着の対象」「愛着形成の時期」「母子分離の影響」に対する意識を中心に—

諏訪きぬ

はじめに

教育学研究紀要第16号「保育者の育児意識の変容」において、「母性愛」「愛着形成要因」「愛着の対象」「愛着形成の時期」「母子分離の影響」についての保育者の育児意識がどのように変容したかを、1987年調査と1999年調査とを比較検討することを意図していた。しかし紙数の関係から「母性愛」「愛着形成要因」に対する意識だけに限らざるを得なかった。本論文では残された「愛着の対象」「愛着形成の時期」「母子分離の影響」に対する保育者の育児意識の変容を明らかにし、拡大する低年齢児保育を担う保育者のあり方を検討する一助としたい。

1. 研究の目的

2000年度から始まった「新エンゼルプラン」では、2004年度までの低年齢児受け入れ枠の目標値を68万人とし、99年度実績より11万6千人増やすことを計画している。低年齢児保育拡大策と並んで、1998年度からは乳児保育の指定保育所方式が改められ、どの保育所でも乳児保育を実施できるという、いわゆる乳児保育の一般化を図った。

こうした低年齢児保育の拡大・推進策の急激な展開の下で、その保育に当たる保育者はどのような意識をもって臨んでいるのだろうか。「3歳までは母の手で」とする「3歳児神話」を内包する「保育者の育児意識」は、どの程度克服されてきているのだろうか。本研究の目的は、1987年に実施した「保育者の育児意識調査」と同じ内容の調査を同一対象園で実施し、「エンゼルプラン」実施以前と実施以降の「保育者の育児意識」の変容について比較検討することである。

2. 研究の方法

(1) 調査対象園の選出

1987年の調査では、東京都23特別区、札幌・横浜・川崎・名古屋・京都・大阪・福岡・北九州市の8政令指定都市、当時乳児保育の実践がよく行われていた深谷・八王子・静岡・津・徳島・鳴門市の6市の中から乳児保育実施園を選び出し、設立年代についても昭和20年代（それ以前も含む）、30年代、40年代、50年代に区分して、526園を調査対象園として選出した。今回は前回調査で回答のあった235園を調査対象として調査用紙を送付し回答を求めた。

(2) 調査期間および回収率

① 調査時期：1999年5月

③ 回収数・回収率：147園（62.5%）

回答保育者数：426人（各園当て3部の調査用紙を送り、3歳未満児保育担当者からの回答を求めた（前回は607人）。

(3) 質問項目の構成と評定尺度

① 質問項目の構成：

前回と同様に、保育者の育児意識を1)母性愛について（項目1～4）、2)愛着形成の要因について（項目5～22）、3)愛着の対象について（項目23～31）、4)愛着形成の時期と母子分離による子どもへの影響について（項目32～43）の意識から問うことにした。それら43項目は、＜①生得説＞、＜②動因低減説＞、＜③愛着行動制御説＞、＜④コミュニケーション欲求充足説＞という4つの立場（型分け）を内包する質問項目として作成されている。

乳児保育や低年齢児保育の拡大によって、生得説→動因低減説→愛着行動制御説→コミュニケーション欲求充足説的見解へと保育者の意識が変容するのではないかとの仮説に立って作成されたものであった。そして前回調査においては、その型分けを用いて保育者の育児意識がどのように表れるかに着目して分析を行った。しかし43項目すべてが4つの型分けにすっきり区分されてはいない。今回の調査分析に当たっては、前回調査と同一項目を使用し、型分けについては諏訪が若干の修正を試みた。

② 評定尺度および評定値：

評定尺度は、1＝「そうは思わない」、2＝「どちらかといえばそうは思わない」、3＝「どちらともいえない」、4＝「どちらかといえばそう思う」、5＝「そう思う」の5段階とした。また分析に当たっては、必要に応じて1、2を否定的見解、3を中立的見解、4、5を肯定的見解として扱うことにする。さらに「そうは思わない」を1点、「どちらかといえばそうは思わない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばそう思う」を4点、「そう思う」を5点として、各項目に対する保育者の評定値を算出する。

3. 研究の結果と考察

(1) 愛着の対象についての意識

表1は愛着の対象に関する9項目の型分けと保育者の評定値を示したものである。愛着の対象についての質問項目9つのうち、項目24、25を除く7項目で有意差が見られた。生得説的な意識に該当する項目23「子どもが一番愛着を持つのは、常に母親だけであると思う」、項目30「3歳未満の時期に、愛着の対象として母親以外の人が複数できることは、子どもにとって決して望ましいことではないと思う」の2項目を除いて、他の6項目はコミュニケーション欲求説的な意識にかかわる項目が多いものの、一つの説に型分けできない項目となっている。その中には項目24「保育者は、母親にはどうしてもかなわないと思

う」、項目26「子どもは複数の人に対して愛着を持つことができると思う」、項目27「愛着の対象となる人が数人いても、子どもは子どもなりに優先順位を持っていると思う」、項目29「園の保育者でも、母親の代わりをすることができると思う」、項目31「子どもの要求を適切に満たしてあげることができれば、母親よりも保育者の方に子どもが愛着を持つことさえあると思う」など、型分けはともかくとして、保育園における「保育者-子ども」の関係を問う指標となり得る項目が数多く含まれている。したがってここでは愛着の対象に関する生得説的な意識の変容とコミュニケーション欲求説的な意識の変容の2点からみておくことにしたい。

1) 生得説的な意識の変容

項目23「子どもが一番愛着を持つのは、常に母親だけであると思う」と項目30「3歳未満の時期に、愛着の対象として母親以外の人が複数できることは、子どもにとって決して望ましいことではないと思う」は、いずれも「愛着対象は母親ただ一人が望ましい」とする意識（モノトロピイ説）とかかわるものである。両項目共に「そうは思わない」が5.3ポイント、2.4ポイント、それに「どちらかと言えばそうは思わない」を加えると、否定的見解がそれぞれ9.7ポイント、4.5ポイント増加している。また「そう思う」が共に2.1ポイント、3.8ポイント減少し、「どちらかと言えばそう思う」を加えると、肯定的見解がそれぞれ4.1、8.1ポイント減っている。また両項目共に否定的見解が75%を占めているところから、愛着の対象を母親一人に限定する見方は徐々に否定されていく傾向にあるといえよう。しかし項目24「保育者は、母親にはどうしてもかなわないと思う」を肯定する見解も70%に上っており、「そう思う」は4.9ポイント増えている。

2) コミュニケーション欲求説的な意識の変容

コミュニケーション欲求説的な意識にかかわる項目のうち、項目31「子どもの要求を適切に満たしてあげることができれば、母親よりも保育者の方に子どもが愛着を持つことさえあると思う」は、愛着対象を母親に限定せず保育者にまで拡大する考え方である。「そう思う」は4.7ポイント、さらに「どちらかと言えばそう思う」を加えると5.8ポイント下がっている。肯定的見解の減少だけでなく、肯定的見解37.0%、中立的見解37.2%、否定的見解25.9%と見解が3分立っており、愛着対象を「母親」から「保育者」への拡大を容認する意識には、まだまだ遠い意識状況といえよう。

項目26「子どもは複数の人に対して愛着を持つことができると思う」は、項目23の反転項目として用意された項目である。ダブルアタッチメントを支持する考え方であるが、この項目の変容が大きい。「そう思う」が58.6%から0.5%へ58.1ポイントも減少しており、「どちらかと言えばそう思う」を加えた肯定的見解は、34.1ポイントもの落ち込みとなった。一方「そうは思わない」は0.8ポイント、「どちらかと言えばそうは思わない」は6.2ポイント増え、ダブルアタッチメントを支持する見解も若干増えてはいる。しかし総じて言えることは、複数の者への愛着、すなわちダブルアタッチメントの見方を否定する傾向が顕著に増加していることであり、また「どちらとも言えない」も27.1ポイントも上昇している。ここから保育者に対する子どもの愛着のベースとなるダブルアタッチメント説を支持する見解は、今、大きく揺らいでいると

いえよう。

しかし項目27「愛着の対象となる人が数人いても、子どもは子どもなりに優先順位を持っていると思う」では、「そう思う」4.4ポイント、「どちらかと言えばそう思う」6.2ポイント増加しており、優先順位を肯定する見解は9割近くに上っている。

こうした結果から、子どもが複数の愛着対象を持つことについてはかなりの揺れがみられるものの、子どもは複数の愛着対象にそれなりに優先順位を持つという意識はかなり定着してきていることが分かる。

3) 「母親に代わるもの」に対する意識の変容

項目28「子どもは、母親よりも父親に、より強い愛着を持つ場合もあると思う」、項目29「園の保育者でも、母親の代わりをすることができると思う」は愛着の対象として、「母親に代わるもの」をたずねる項目である。項目28では「そう思う」3.9ポイント、「どちらかと言えばそう思う」4.5ポイント増加し、愛着対象として母親より父親が選ばれ得る可能性のあることを肯定する見解は74.5%に上っている。次ぎに保育者が母親の代わりになり得るかを問う項目29では、「そう思う」は5.7ポイント減少し、「どちらかと言えばそう思う」を加えた肯定的見解は1.9%の減少となっている。また「そうは思わない」も7.0ポイント減少して、中立的見解が3.7ポイント増えている。ここでも先に見たダブルアタッチメントに対する見解と同様に、肯定的見解34.7%、中立的見解32.2%、否定的見解32.4%と、見解が完全に三分立していることが分かる。

(2) 愛着形成の時期、母子分離による子どもへの影響についての意識

表2は愛着形成の時期、母子分離による子どもへの影響に関する12項目の型分けと保育者の評定値を示したものである。12項目のうち有意差があったのは4項目で、項目32「生後3歳までは、母親への愛着形成に重要な時期なので、できることなら家庭の中で育てたいと思う」(③愛着行動制御説)、項目35「保育者と子どもとの間に適切なかかわりがあれば、保育園に預けることによる母子分離の子どもへの影響は、心配する必要がないと思う」

(④コミュニケーション欲求充足説)、項目40「子どもが母子分離によって受けた精神的な傷は、生涯残ると思う」(③愛着行動制御説)、項目43「子どもが片時も母親から離れないよりも、一定の期間、保育園などで過ごすことは、かえって母親への愛着形成に良い影響を与えと思う」(④コミュニケーション欲求充足説)であった。

項目32は、「3歳までは母の手で」とする「3歳児神話」を代表する質問項目である。「そう思う」が6.4ポイント、「どちらかと言えばそう思う」が1.8ポイント減少し、「どちらかと言えばそうは思わない」が6.9ポイント増加しており、3歳児神話を肯定する意識がやや薄らぐ傾向がみられる。しかし否定的見解32.5%、中立的見解28.1%、肯定的見解39.4%と見解は三分立しており、4割近い保育者の意識の中で「3歳児神話」はまだまだ生き続けている。『厚生白書』(平成10年版)が3歳児神話を否定しても、すぐそれが解消されるものではないことを示しているともいえよう。

項目35は、適切な「保育者-子ども」のかかわりがあれば、母子分離の影響はないのではないかを問う項目である。「そう思う」が3.5ポイント減少したものの、「どちらかと言えばそう思う」が9.6ポイント増えたため、肯定的見解は4.9ポイント上昇し、その比率は

72%となっている。逆に母子分離を心配する見解は12.8%に過ぎなかった。

項目40は、母子分離による精神的な傷の影響を問うものである。「そう思う」0.4ポイント、「どちらかと言えばそう思う」5.3ポイントと肯定的見解が5.6ポイント増加し、「そうは思わない」7.0ポイント、「どちらかと言えばそうは思わない」1.9ポイントと否定的見解が8.9ポイント減少して、母子分離による精神的な傷の影響を案ずる傾向が若干強まる傾向が見られる。この項目も、否定的見解38.9%、中立の見解37.7%、肯定的見解23.3%に三分立しており、保育者の意識にばらつきが見られる項目である。

項目43は、愛着形成に良い影響を与える母子分離（ハッピーセパレーション）を問う

項目である。「そう思う」が4.9%減少したが、「どちらかと言えばそう思う」が5.0ポイント増えたため、肯定的見解は0.1ポイント増に止まっている。また「そうは思わない」と「どちらかと言えばそうは思わない」を合わせた否定的見解も3.8ポイント減っており、ハッピーセパレーションについては「どちらとも言えない」と考える保育者が半数を占めている。この項目も、否定的見解は12.0%と少ないものの、中立の見解49.3%、肯定的見解38.8%と、保育者の育児意識の分立、揺らぎが見られる項目といえよう。

4. 総 括

(1) 愛着の対象は拡大するか

1) 「母親ただ一人」意識は減少傾向

愛着対象に関する生得説的意識を問う項目23、30共に有意差が認められた。愛着対象を「母親ただ一人」とする意識は徐々に減少する傾向にあるが、「保育者は、母親にはどうしてもかなわないと思う」（項目24）を肯定する見解は7割に上っている。

2) 保育者を愛着対象とする意識は4割弱

保育の仕方によっては、子どもは母親より保育者に愛着をもつとする項目31は、肯定的見解が5.8ポイント下がっただけでなく、肯定的見解37.0%、中立の見解37.2%、否定的見解25.9%と意見がくっきりと3分割される結果となった。子どもの愛着対象として「母親」と「保育者」とを並置する意識、さらには「母親」から「保育者」へ移行・拡大する意識は、まだまだといえるようである。

3) ダブルアタッチメントを肯定する見解の弱体化

子どもが愛着対象とするのは「母親だけ」か「複数の人」かは、今なお心理学上未決着の課題である。保育を担う保育者が、子どもを取り巻く複数の大人たちを子どもの愛着対象としてどう位置づけていくかは、低年齢児保育を実施する上で以前から大きな課題でもあった。子どもと日々かわる母親と父親、両親と保育者、とりわけ母親と保育者、複数の保育者をどう位置づけるかは、低年齢児保育が拡大した今日においても、保育実践のなかでぶつかる大きな問題となっている。

ダブルアタッチメント説をベースにして、担当制など「保育者と子どもの情緒的な関係」「心の絆」をはぐくむ必要性が1990年改訂の「保育所保育指針」等でも提起されているが、項目26「子どもは、複数の人に対して愛着を持つことができると思う」に対して、肯定的見解が33.2ポイントも激減したことは、理論的にも実践的にも検討

しなければならない課題を浮上させたといえよう。愛着対象は母親一人ではないにしても、それに代わるものとして保育者を積極的に位置づけようとする実践も理論も明確になっていないところに、こうした保育者意識の変容の要因を求めることができるように思われる。

しかし項目27「子どもは複数の愛着対象にそれなりに優先順位を持つ」という意識は強まる傾向にあり、その点からすれば複数の愛着対象は誰かが問題となろう。項目29は保育者が母親の代わりになり得るかを問う項目であるが、「そう思う」は6.1ポイント減少し、「そうは思わない」も7.0ポイント減少している。肯定・否定とも確信的な意識が減少して、肯定的見解35.0%、中立的見解32.4%、否定的見解32.6%と見解が完全に三分立している。

保育者が母親に代わりうるとする意識は35.0%にとどまっている反面、父親への愛着については肯定する見解は74.5%と高率を占めていた。保育者は、愛着対象として保育者自身よりも父親を肯定する意識が顕著であり、父親への期待感が高いといえる。その意味では、保育者の育児意識は生得説的意識に、今なお色濃く規定されているのではないだろうか。

(2) 愛着形成の時期、母子分離による子どもへの影響に関する意識の変容

項目32の「3歳までは母の手で」とする「3歳児神話」を代表する質問項目では、3歳児神話を肯定する意識がやや薄らぐ傾向がみられた。しかし否定的見解32.5%、中立的見解28.1%、肯定的見解39.4%と見解は三分立しており、『厚生白書』（平成10年版）が3歳児神話を否定しても、3歳児神話＝母親の育児役割観は保育者の中に根強いことを示している。こうした意識もまた、保育者と子どもの関係を愛着形成の対象と見ることを躊躇させる要因をなしているように思われる。

項目35は、適切な「保育者－子ども」のかかわりを前提にして、母子分離の影響を問うているが、肯定的見解が7割を越えていた。逆に母子分離を心配する見解は12.8%に止まっており、「保育者と子どもの間に適切なかかわり」があれば母子分離の心配はないという保育者の意識はかなり定着をみているといえよう。したがって保育者と子どものどのような関係が「適切」なのか、保育実践に添いつつその理論化につとめ、保育者の間に「保育者と子どもの望ましいあり方」についてのアイデンティティを形成することが望まれよう。

また母子分離による精神的な傷の影響を問う項目40も、否定的見解38.9%、中立的見解37.7%、肯定的見解23.3%と、意識の分立を示し、愛着形成に良い影響を与える母子分離（ハッピーセパレーション）を問う項目43も、否定的見解は12.0%に過ぎないものの、中立的見解49.3%、肯定的見解38.8%と分立が認められた。以上のように愛着形成の時期と母子分離による子どもへの影響に関する保育者の意識についても、多少の変容はあるものの、かなりの見解の対立を含んだままであることが見い出された。

おわりに

以上の分析を通して、保育者と子どもの関係性について十分なアイデンティティが形成されず、低年齢児保育の内容・方法も十分検討されないまま、社会のニーズに押される形で拡大する低年齢児保育が、保育者と子どもの関係を問にくい状況に置き、結果的に保育者の専門的役割を過小評価する傾向を生んでいるのではないかとの推察を持つに至った。すでに「担当制」「持ち上がり担任制」など、保育者と子どもの関係を継続的に濃密にしようとする保育実践もかなり試みられている。今後は「保育者と子どもの関係」を基軸にし、その継続的關係を重視する園の保育者の育児意識とそうでない園の保育者の育児意識を比較考察することによって、低年齢児保育のあり方を追究したいと考える。

表1 愛着の対象に関する意識

評定値：上段旧調査・下段新調査（人），（ ）は%

番号	型 分 け				質 問 項 目	評 定 値					
	① 生得説	② 動因低減説	③ 愛着制御説	④ コミュニケーション欲求説		1 そう 思わない	2 どちらか と言え ば そう 思わ ない	3 どちら ともい えない	4 どちら かと言 え ば そう 思 う	5 そう 思 う	無 記 入
* 23	○				子どもが一番愛着を持つのは、常に母親だけであると思う	280 (46.1) 219 (51.4)	116 (19.1) 100 (23.5)	134 (22.1) 72 (16.9)	48 (7.9) 24 (5.9)	21 (3.5) 6 (1.4)	8 (1.3) 5 (1.2)
24	△	△	△		保育者は、母親にはどうしてもかなわないと思う	45 (7.4) 19 (4.5)	38 (6.3) 24 (5.6)	86 (14.2) 76 (17.8)	160 (26.4) 132 (31.0)	271 (44.6) 169 (39.7)	7 (1.2) 6 (1.4)
25	?	?	?		子どもが愛着を持てるのは、母親に限らず、特定の一人だけであると思う	374 (61.6) 259 (60.8)	119 (19.6) 80 (18.8)	89 (14.7) 69 (16.2)	13 (2.1) 10 (2.3)	8 (1.3) 3 (0.7)	4 (0.7) 5 (1.2)
** 26			?	▲	子どもは複数の人に対して愛着を持つことができると思う	5 (0.8) 7 (1.6)	8 (1.3) 32 (7.5)	57 (9.4) 156 (36.6)	179 (29.5) 229 (53.8)	352 (58.0) 2 (0.5)	6 (1.0) 0 (0.0)
** 27				△	愛着の対象となる人がふく人数いても、子どもは子どもなりに優先順位を持っていると思う	27 (4.4) 7 (1.6)	12 (2.0) 3 (0.7)	75 (12.4) 27 (6.3)	176 (29.0) 150 (35.2)	311 (51.2) 237 (55.6)	6 (1.0) 2 (0.5)
** 28	?	?	?		子どもは、母親よりも父親に、より強い愛着を持つ場合もあると思う	25 (4.1) 8 (1.9)	33 (5.4) 7 (1.6)	143 (23.6) 93 (21.8)	141 (23.2) 118 (27.7)	257 (42.3) 197 (46.2)	8 (1.3) 3 (0.7)
** 29		△	△	△	園の保育者でも、母親の代わりにすることができると思う	126 (20.8) 61 (14.3)	72 (11.9) 77 (18.1)	173 (28.5) 137 (32.2)	117 (19.3) 102 (23.9)	100 (16.5) 46 (10.8)	19 (3.1) 3 (0.7)
** 30	○				3歳未満の時期に、愛着の対象として母親以外の方が複数できることは、子どもにとって決して望ましいことではないと思う	303 (49.9) 233 (52.3)	127 (20.9) 96 (23.0)	105 (17.3) 90 (21.1)	40 (6.6) 10 (2.3)	26 (4.3) 2 (0.5)	6 (1.0) 3 (0.7)
* 31				△	子どもの要求を適切に満たしてあげることができれば、母親よりも保育者の方に子どもが愛着を持つことさえあると思う	101 (16.6) 53 (12.4)	67 (11.0) 56 (13.1)	175 (28.8) 157 (36.9)	126 (20.8) 84 (19.7)	131 (21.6) 72 (16.9)	7 (1.2) 4 (0.9)

注1 *,**はカイ2乗検定で有意差のあった項目 (*は $p<0.05$, **は $p<0.001$)

注2 ▲は反転項目

表2 愛着形成の時期と母子分離による子どもへの影響に関する意識

認定値：上段旧調査・下段新調査（人），（ ）は%

番号	型 分 け				質 問 項 目	評 定 値					
	① 生得説	② 動因低減説	③ 愛着制御説	④ コミュニケーション欲求説		1 そう 思わない	2 ど ちらか と 言 え ば そ う 思 わ な い	3 ど ち ら と も い え な い	4 ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 う	5 そ う 思 う	無 記 入
** 32			○		生後3歳までは、母親への愛着形成に重要な時期なので、できることなら家庭の中で育てたいと思う	150 (24.7) 107 (25.1)	44 (7.2) 60 (14.1)	157 (25.9) 119 (27.9)	106 (17.5) 67 (15.7)	140 (23.1) 71 (16.7)	10 (1.6) 2 (0.5)
33	○				子どもの愛着は、生まれた時から生みの母親に形成されているものであるから、いつ母子分離が起こっても、子どもへの影響は少ないと思う	356 (58.6) 238 (55.9)	100 (16.5) 99 (23.2)	112 (18.5) 70 (16.4)	18 (3.0) 11 (2.6)	7 (1.2) 3 (0.7)	14 (2.3) 5 (1.2)
34		?	?		乳幼児期に形成された愛着は簡単には消えず、いつまでも残っていくと思う	34 (5.6) 10 (2.3)	35 (5.8) 27 (6.3)	125 (20.6) 93 (21.8)	175 (38.2) 128 (30.0)	232 (38.2) 161 (37.8)	6 (1.0) 7 (1.6)
** 35				○	保育者と子どもとの間に適切なかかわりがあれば、保育園に預けることによる母子分離の子どもへの影響は、心配する必要がないと思う	47 (7.7) 25 (5.9)	26 (4.3) 29 (6.8)	124 (20.4) 64 (15.0)	149 (24.5) 141 (33.1)	254 (41.8) 163 (38.3)	7 (1.2) 4 (0.9)
36			○		3歳未満の時は、子どもを母親から片時も離さない方がいいと思う	370 (61.0) 286 (67.1)	105 (17.3) 76 (17.8)	125 (20.6) 93 (21.8)	28 (4.6) 7 (1.6)	8 (1.3) 4 (0.9)	10 (1.6) 2 (0.5)
37			○		最初の3年間に形成される母親との絆(きずな)が浅いものであると、その後の人間関係(友達など)も、うわべだけの浅いものになると思う	105 (17.3) 72 (16.9)	66 (10.9) 54 (12.7)	203 (33.4) 169 (39.7)	138 (22.7) 83 (19.5)	87 (14.3) 46 (10.8)	8 (1.3) 2 (0.5)
38			○		乳幼児期に母親との間に愛着を形成できない子どもは、将来、人を愛せない性格になるのではないかと思う	124 (20.4) 70 (16.4)	77 (12.7) 59 (13.8)	229 (37.7) 171 (40.1)	121 (19.9) 98 (23.0)	50 (8.2) 26 (6.1)	6 (1.0) 2 (0.5)

39			○	3歳未満時に、母子分離による精神的な傷を受けた場合でも、その後のより良いかわり方で回復することは充分できると思う	10 (1.6) 8 (1.9)	22 (3.6) 21 (4.9)	97 (16.0) 53 (12.4)	218 (35.9) 171 (40.1)	250 (41.2) 171 (40.1)	10 (1.6) 2 (0.5)
** 40			○	子どもが母子分離によって受けた精神的な傷は、生涯残ると思う	107 (17.6) 45 (10.6)	87 (14.3) 53 (12.4)	200 (32.9) 158 (37.1)	120 (19.8) 107 (25.1)	77 (12.7) 56 (13.1)	16 (2.6) 7 (1.6)
41			○	子どもが母親から離れると不安を感じるのは、母親に対する愛着の形成度合いと関係があるからだと思う	35 (5.8) 20 (4.7)	43 (7.1) 25 (5.9)	140 (23.1) 87 (20.4)	198 (32.6) 160 (37.6)	180 (29.7) 123 (28.9)	11 (1.8) 11 (2.6)
42			○	子どもが母親から離れる時に、最も不安を感じるのは1歳頃であるから、その頃に保育園へ入園すると、心理的な不安が大きく伴うと思う	111 (18.3) 93 (21.8)	75 (12.4) 66 (15.5)	183 (30.1) 127 (29.8)	149 (24.5) 85 (20.0)	81 (13.3) 44 (10.3)	8 (1.3) 11 (2.6)
43			○	子どもが片時も母親から離れないよりも、一定の期間、保育園などで過ごすことは、かえって母親への愛着形成に良い影響を与えると思う	60 (9.9) 33 (7.7)	34 (5.6) 17 (4.0)	267 (44.0) 206 (48.4)	118 (19.4) 104 (24.4)	112 (18.5) 58 (13.6)	16 (2.6) 8 (1.9)

注1 *,**はカイ2乗検定で有意差のあった項目 (*は $p < 0.05$, **は $p < 0.001$)

注2 ▲は反転項目